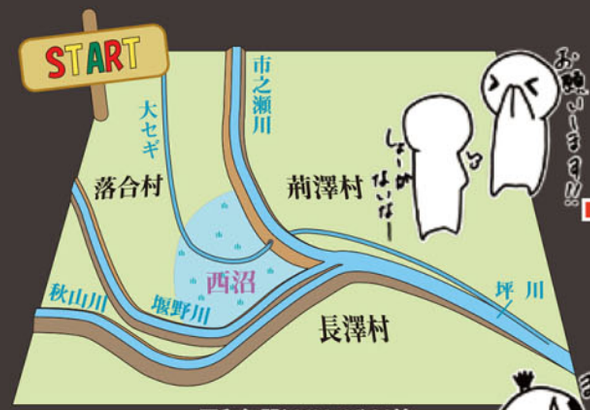
西沼の水を抜け！

～ 落合地区と井路縁川樋門 ～

ふるさとの誇り 98



天和年間(1681- 84) 以前

市之瀬川の下を通して荊澤地内で坪川に合流していた。この頃すでに周囲の河川の天井川化と樋門による排水が成立していたことがわかる。

安永４年（1775）

この件は代官所に差し戻され、近隣の村々の仲裁もあって、西沼の排水は坪川の河川敷の中に長さ百間（180m）余りの埋樋を通じで排水。出口は関係村が共同で定期的に管理し、排水が滞らないようにするということで、いったん決着。

文化８年（1811）

水を受け入れることになる長澤村は猛反対したが、代官所の裁定により厳しい条件をつけて、関係村が合意し、ようやく現在の形となった。

～西沼をめぐる歴史～

天和年間(1681-84)

坪川の河床が高くなり、うまく合流できなくなる。そこで坪川へ直接排水（方法は不明）するようにしたが、ここは市之瀬川、堰野川、秋山川がまさに落合う場所。これら河川が運ぶ土砂によってすぐに埋まって、またも排水不能に・・・。

そこで

落合村は、前のように市之瀬川の下を通し、坪川への排水を願ったが、荊澤村に断られてしまう。荊澤村の言い分は、「河川の最終合流先である釜無川の河床が上がり、出水時に逆流してくる。坪川の河床も上がり度々氾濫。そんな状況で西沼の水まで受け入れることはできない」というもの。

明和３年(1766)
～安永３年（1774）頃

代官所が仲裁に入り、西沼の水は、堰野川、秋山川の下を通して、長沢地内の坪川に落とすよう裁定があったが・・・今度は長澤村が猛反対。代官所の裁定を不服として江戸の奉行所へ訴え出た　！

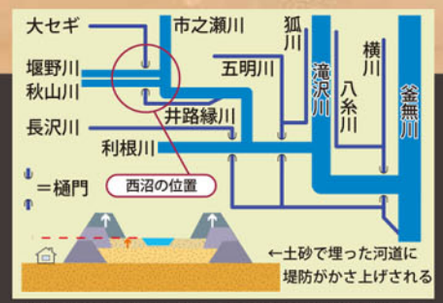
しかし、こんなお法でうまくいくはずもなく・・・

文化７年（1810）

その後さらに坪川の河床が上がり、またも排水が困難に！　落合村・荊澤村は、西沼の排水を坪川の下を通して、坪川の南側(長澤村地内)に抜き、そこから坪川に落とすように代官所に願い出た。

西沼絵図（成妙寺蔵）

文化11年(1814)に描かれたもの。西沼を南から見ており、右奥に見える山は八ヶ岳。手前の川が堰野川、右側に流れてくる川は市之瀬川。両河川とも天井川となっており、そこにはさまれた西沼が耕作不能の低湿地となっていることがよくわかる。右の写真は、現在のようす。



天井川のできる仕組みと周辺の河川のようす

南アルプス市の南部には、甲府盆地中の川が集まってきます。その際、山地を勢い良く流れ下ってきた河川は、周囲の山肌を削って運び、下流域に天井川を形成しました。中でも、天井川と天井川が合流する地点では、いわば「川の壁」に囲まれる形となって排水が困難になり、これに対応するために、川の下に川を通す「河川の立体交差」が発達して、ここに独特の景観が生まれたのです。※ 今回はその中で、落合地区の西沼と呼ばれた低湿地をめぐる歴史を取り上げます。

落合地区の市之瀬川※※と堰野川の間に降った雨や、湧き出た水は、最終的には全てが「大セギ」と呼ばれる川を通じて西沼に集まります。ここでも周囲は天井川に囲まれるため、その下に立体交差する樋門を設けて排水しなければなりません。現在、大セギの水は井路縁川樋門と呼ばれる樋門を通じて坪川に排水されています。

もし、西沼の排水が滞ると、その影響は周辺の耕地ばかりではなく、地域全体が水没しかねません。西沼の水を抜いて、スムーズな排水を促すことは、当時の落合村にとっては死活問題だったのです。しかし、一方でその水を受け入れることは、自らも水害に苦しむ、下流の荊澤村や長澤村にとっては迷惑以外の何者でもありませんでした。

地域に残る記録からは、落合村と、その下流の荊澤村、長澤村（現富士川町長澤）との西沼排水をめぐる争いが、江戸時代の天和年間（一六八一―八四）にはじまり、文化八年（一八一一）年まで、実に百二十年以上に及んだことが明らかとなります。また、最終的にその影響は、坪川の抜本的な河川改修が開始された昭和三十七年（一九六二）まで続いています。

西沼排水の百二十年を超える変遷から、我々は自らの村の存立をかけて水に対峙した、当時の人々の苦労の一端を知ることができます。現在も、井路縁川樋門の重要性は変らず、大雨が予想される場合は、市役所職員が配置され、昼夜風雨にさらされながら排水が滞らないように対応しています。

現在の井路縁川樋門

落合地区の水を集めた大セギは、ここから市之瀬川、堰野川の下に潜り、坪川南側に出て坪川と合流する。川を越えてから、坪川と合流するまでの部分が井路縁川。写真中の ■ は、史料から明らかとなる天保４年(1834)頃の樋門の大きさ。現在よりもずいぶん小さかったことがわかる。

※ 平成25年6月号の本欄で紹介しました。

※※ かつては、市之瀬川と堰野川、秋山川の合流点より下流を坪川と呼んでいましたが、現在はその上流、旧市之瀬川分も含めて坪川と呼ぶようになっています。今回は、歴史的な呼び方を尊重し、三川合流点より上流は市之瀬川と呼ぶことにします。

写真／文　文化財課